

茶色の朝 いまここにある危機

2019年3月

眞鍋由比

今月紹介したいのはちょっとおかしいけどこのぐらいたいしたことない、と思って何も言わず何もせずにすませていたことがおおごとになってしまうお話。『茶色の朝』フランク・パヴロフの物語。大月書店 2003年。

犬やネコは茶色じゃなきゃダメという法律ができた。しかたないな、うちのは白と黒とのぶちだけでもう年もとっていたし、あきらめてしまおう。

友だちの犬？ああ、茶色じゃなかったから処分しちゃったらしいよ。え、今は茶色の犬を飼っているんだって。

そうそう今の政府に批判的な新聞は発禁になったらしいよ。じゃあ読むものなんかない？

茶色の新聞は競馬とスポーツはマシだから我慢しようか。口うるさく社会問題に噛み付く新聞がなくなったけど、それについてレストランのみんなは騒いだりしてない。たいしたことないのかな。おれが心配性なだけ？

つぎは図書館の本。茶色でない本はぜんぶ強制撤去されてしまった。

そして、とうとう昔、茶色以外の犬を飼っていた友人が逮捕されてしまった。そしていまウチの玄関にも人がきて俺を連れて行こうとしている…

もちろんこれは比喻で、茶色はナチスを想起させる色だそうです。独裁の色。「少なくともまわりからよく思われていればほっといてもらえるし」と考えないでやりすごしていたらたいへんなことが起きてしまうという警告の物語です。

元町映画館で韓国のドキュメンタリー映画「共犯者たち」を見ました。

セウォル号で修学旅行の生徒たちが船とともに沈んでいったのを覚えていますか？韓国のメディアはあ那时候、全員救助されたと国内にはウソを報じました。船に取り残された生徒がいる、と現場取材した記者が電話しているのに、テレビは報道しなかった。子どもたちは見殺しにされました。どうして？

政権に都合がわるい報道だから。そんなニュースが国民に流れたら、一気に政権への不満が噴出して大統領の座があぶないから。政府は公共放送の社長を自分たちのいいなりになる人物にすげ替えていました。

そんなことのために子どもたちの救助がされないまま、沈んでいったなんてゆるせない。遺族は怒りました。当然です。

実は前の社長がBSE問題の時に批判的な報道をさせたからと首を飛ばして、大統領の言うことをきく人物を社長にすげていたのです。それでセウォル号の悲劇や、崔順実（チェ・スンシル）ゲート事件の隠蔽が起ってしまいます。

それでだまっている人たちばかりではありません。大統領のいいなりになる社長に猛反対するテレビマンがfacebook liveで力強く自分の意見を投稿します。けれど本当は彼だってそんなに強くない。もし自分が孤立して、だれも賛同してくれなくて、ただひとりクビにされたら…インタビューされた彼は泣きそうになっていました。ところが、次の日、さざめく波のようにどんどんfacebookの自撮りをする人が増えていって…

自分の職をかけてまで、意見を主張できるのか？実際に政権に批判的な優秀な記者たちがスケート場や掃除などのだれでもできる仕事に追いやられたり、何にも悪いことはしていないのにクビ

になったりしていくなか、自分に何ができる？

韓国の李明博（イ・ミョンバク）・朴槿恵（パク・クネ）両大統領の9年間は自由に報道ができない状態でした。何の証拠もないのにクビにされた記者が非営利独立メディア、“ニュース打破”でこの映画を作り上げました。本当のことが報道されなかったら、国民はだまされ、諸外国から信頼されず、人権が守られない恐ろしい国になってしまいます。韓国には闇といえる部分はある。けれどこのように権力に立ち向かおうとしているジャーナリストたちの姿をみて、力強い希望を感じました。今の日本はどうでしょうか？日本も同じように権力に対する批判ができれば期待が持てるのかもしれない、立ち直って民主主義の国にしていけるのかもしれない、傷だらけになるだろうけど、と思いました。

